

聴覚障害児の日本語言語発達のために

指定討論:ALADJINを聴覚障害教育の領域から読み解く

(3) 聾児の言語発達研究の立場から

第3回東大先端研・聞こえのバリアフリー・シンポジウム

2012/9/23 目白大学 齋藤佐和

「聴覚障害児の療育等により言語能力等の発達を確保する手法の研究」の意義

- アウトカム研究であることを明確にし、聴覚障害児の日本語発達に関わるエビデンス提示を意図したこと
 - 研究デザインにおいて基本的に医療系(言語聴覚療法)評価・介入モデルによるが、教育系の協力もかなり得られていること
 - 日本語習得に関わる現行の評価法を構造的に採用し、多面的・総合的・横断的視点での分析を実現しつつ、限界や今後の課題への言及もしていること
-

ALADJINの言語系検査の構成

□ 総合系:

- * 話しことば一質問・応答関係検査(TQAID)/[まんがの説明](#)
- * 書きことば一学力検査(国語、算数)

□ 分析系:

- * 語彙:理解検査(PVT-R+SCTAW)
産出検査(WFT カテゴリー別、音韻別)
 - * 構文:理解検査・産出検査(STA)/[J.COSS構文理解](#)
 - * 言語発達に影響する能力(STRAW/RCPM/PARS/ToM)
-

客観性、共通性を求めた評価への歩み

—教育領域でのこれまでの努力—

□ 学校単位のテストによる校内相対評価の時代

□ 標準化された検査の導入

例：発達検査、WISC-R等知的能力検査、K-ABC、ITPA
絵画語い発達検査、読書力検査（幼児児童、小・中学生用）、
学力検査

□ （補聴下の）聴取能力検査に関わる工夫

例：JANT(数唱聴取検査)日常生活文了解度検査、
Closed方式の単語聴取検査など

□ 発音明瞭度検査 100(67)単音節のランダム配列表を利用した評価

読み書き能力の形成：読書力に関わる問題

- 平均読書学年：3～4年レベルで伸びが鈍化
- 読字力：標準成績と同等かそれ以上
- 読解・鑑賞力：量的な遅れ
- 語彙力：量的質的問題
- 文法力：量的質的問題
- 個人差の大きさ

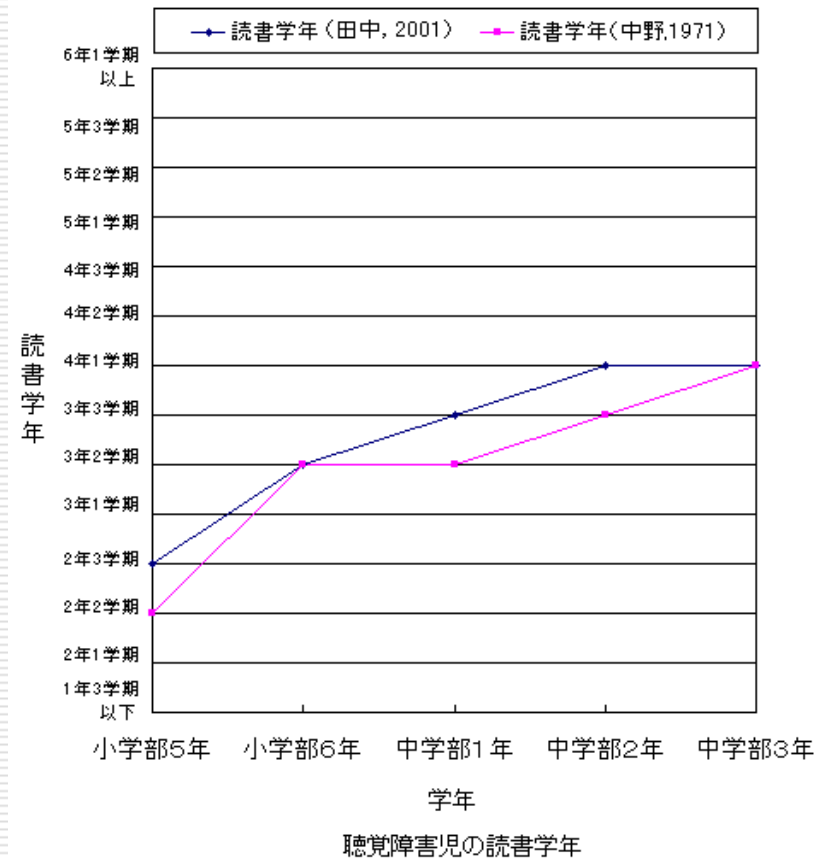


表3:各類型における平均値, 標準偏差およびその段階評価

類型と各類型における両群の人数			読字力	語い力	文法力	読解・鑑賞力	総点
類型Ⅰ		平均	9.1	6.3	2	7.9	25.3
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	4.0	3.1	1.5	3.2	8.1
7	7	評価段階	1	1	1	1	1
類型Ⅱ		平均	17.1	6.3	2.4	10.3	36.1
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	1.6	2.4	1.5	2.8	4.1
10	5	評価段階	3	1	1	2	2
類型Ⅲ		平均	19.1	11.0	1.7	12.3	44.2
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	2.1	1.7	1.2	3.1	5.0
23	3	評価段階	4	2	1	2	2
類型Ⅳ		平均	14.7	13.6	5.3	15.1	48.6
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	1.9	4.1	1.6	4.0	6.4
0	22	評価段階	3	3	2	2	2
類型Ⅴ		平均	19.0	13.8	4.9	12.4	50.1
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	1.4	3.0	1.9	2.3	5.7
8	11	評価段階	4	3	2	2	3
類型Ⅵ		平均	19.3	15.2	7.2	20.1	61.8
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	1.6	2.7	2.4	2.8	4.9
14	20	評価段階	4	3	3	3	3
類型Ⅶ		平均	21.6	18.2	10.1	22.4	72.2
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	0.7	3.2	2.2	2.5	4.3
19	11	評価段階	5	3	4	4	4
類型Ⅷ		平均	21.4	22.2	12.2	26.1	82
聴覚障害児群	対照群	標準偏差	1.5	1.6	1.8	2.1	2.3
9	5	評価段階	5	4	4	5	5

ALADJINの結果解釈における留意点

- 補聴閾値に関わる分析が可能であったことから、優位となるコミュニケーション手段にかかわらず、大半の対象者が補聴器あるいは人工内耳による聴覚活用に熱心であると推察される。そのような対象の結果が始めて多く得られた意義は大きい、と同時に解釈における限定も必要。
 - 個人差の大きさは従来からの現実であるが、これまで小学校中学年以降で見られた日本語発達の鈍化やプラトー状態が減少した。今回の対象児の特性の一部と言えよう。
 - 語彙検査では学習言語レベルの検査ツールが加わった点が評価できる。構文発達のツールは十分とは言えない。特定構文でなくより一般性のあるツールが必要。
-

ALADJINに加えていきたい分析や考え方

- 手話能力、手話活用状況の評価が可能になってきたら、今回の結果との関係进行分析
 - 話し言葉、書きことばにおける産出分析
 - * 共通課題によるもの(絵、まんが／ことばによる課題など)
 - * 会話分析 * 作文分析
 - 言語(日本語)の発達段階についての把握:
com.形成期 —生活言語習得期／拡充期 —読み書き基礎学習期／
学習言語習得期 (子どもは日本語で何を理解・表現し、伝え合うのか)
 - コミュニケーション力、学習力、思考力に結びつく
言語発達に向けて教育との連携の必要
-

思考力に結びつく言語力の形成

- まず子どもの情動、行動、経験に結びついた言語習得をめざすー「生活言語の獲得」
 - 経験的な世界を中心に、言語による多様なイメージ交換を数多く経験するー「生活言語のレベルアップ」
 - 基礎的言語力に読み書き能力を加えて、言語によって知識、情報、意思、創造的内容を交換できる力を形成していくー「学習言語の獲得と拡充」
-

生活言語から学習言語へ

一言語によって伝えられる意味の世界の拡大

(表現)

日本語

(意味)

目の前で展開される事柄
(行動・事物・様子・場面・絵など)
そこで起こる感覚・情動
毎日繰り返されること・習慣になっていること

自分の経験のイメージ

近似的経験・擬似的経験

非経験的事項

- * 生活的知識・情報(雑学)
- * 創造的内容(物語)
- * 知識・情報(学習事項)
- * 意見・感想・論述など

イメージ化・理解を助ける
補助手段の利用

書いたもの
の利用
(絵日記など)

生活言語と学習言語という考え方

- 村石昭三(1974)「ことばと文字の幼児教育」 ひかりのくに社
ことばとものの系 vs ことばとことばの系
- 岡本夏木(1985)「ことばと発達」 岩波新書
一次的ことば vs 二次的ことば
- アメリカのバイリンガル理論から (Basic Interpersonal Communication Skill vs Cognitive Academic Language Proficiency) 遊び場の言語 vs 学習の場の言語
- 聾教育には昔から生活言語・学習言語の区別への感性があり、「9歳レベルの峠」(萩原浅五郎 1964)の存在もそこから洞察された。
- 斎藤佐和(1983)「生活言語から学習言語へ」聴覚障害38-8

言語指導(日本語指導)の大きな流れ

- 「生活言語」を育て「学習言語」へつなぐ
 - 発達の節目としての「5歳の坂」と「9歳の峠」
 - 5歳の坂: 生活経験レベルで(他の人の経験や擬似的経験も含めて)日本語による伝達(理解・表現)が自由になってくる。
 - 9歳の峠: 主として読み書きを通して、抽象的表現など、生活経験レベルを越えた言語表現を学習し始める。
 - 「生活言語」の質を高めつつ、読み書き能力と結びつけることによって「学習言語」獲得へ、「9歳の峠」を越える言語活動、教科学習へ
 - 学習言語を生活言語に繰り入れるための働きかけは必要
-